

# 抱一の光琳乾山顕彰資料

牧 野 宏 子

化政期を代表する文人酒井抱一は、俳諧では宝井其角に、絵画では尾形光琳に深く私淑していた。其角百回忌の文化三年春に、百幅の其角像を描き知人に配布したことは自筆句稿『輕拳観（館）句藻』（二十卷十冊、静嘉堂文庫蔵、以下『句藻』と略す）にも記されている。尾形光琳没して百年に当たる文化十二年にも、抱一は光琳顕彰のさまざまな催しを試みた。

本稿で紹介するのは、抱一による光琳・乾山兄弟顕彰活動に関わる文書十点である。抱一にゆかりのある某家に伝わるもので、『句藻』の文化十二年の巻が散佚している現在、貴重な資料といえよう。

相見香雨氏は、「抱一上人年譜考」（『日本美術協会報告』第6号。以下「年譜考」と略す）を、抱一百回忌の昭和二年に著している。同書には当資料を含めた多くの文書が使われ、光琳乾山顕彰に力を注ぐ抱一の姿が克明に記されている。

ここでは、「年譜考」に全文翻刻されているものは、写真と部分紹介にとどめた。十点の資料は、形状から分類して番号を施し、翻

字に際しては、適宜に濁点、句読点などを補った。また、漢字は現行のものに改め、行変えも行なった。断簡は台紙に貼付されているが、破損が著しい。これは、慶應元年、雨華庵の火災によるものである。

- |    |    |            |
|----|----|------------|
| 1  | 断簡 | 文化十二年五月    |
| 2  | 断簡 | 文化十二年四月    |
| 3  | 断簡 | （文政二年冬カ）   |
| 4  | 断簡 | （文政二年冬カ）   |
| 5  | 断簡 | （文政二年冬カ）   |
| 6  | 請取 | 文化十二年七月    |
| 7  | 書状 | 文政二年十二月    |
| 8  | 請取 | 文政三年三月     |
| 9  | 系図 | （文政二年十一月カ） |
| 10 | 拓本 | 文政六年冬      |

右の断簡のうち、1と2は、「年譜考」に全文紹介があるが、文化十二年六月、抱一（鶯邸）主催の光琳百回忌に関わるものである。1に「居士の画跡百幅」、「画幅御携可被下候」とあるように、光琳画を所蔵する知人たちに出品を促している。この呼びかけに応じ、姫路酒井家（当主は抱一の甥）を始め、多くの光琳作品を当時の風流人たちが持参し、光琳展が開かれた。同年刊抱一編『光琳百図』の自跋に、

尾形法橋の百年に当れば、同好の者を招き集けるに、かの法橋の画一幅つゝ携来りぬ。其画百幅に満り、雲煙過眼となさむもはいなしとて縮図となし、一冊とはなりぬ。

とあるのも、この間の事情を伝えている。なお、2には、「開筵于根岸、精舎」とあり、この展観が根岸の寺で催されたことが窺われるが、これは抱一の筆ではないようである。

この折にも抱一は、其角忌と同じように記念の花瓶図百幅などを描いて同好の士に配布している。また、光琳の菩提寺である京都妙顕寺には、一幅の観音像を寄進した。その請取が6である。「抱一様御直画之観音菩薩尊像一軸但桐面入、外緒方流略印譜（一冊）、並方金貳百匁」とあり、同年七月十八日の日付である。

左脇に、百合・立葵・紫陽花などを活けた花瓶を配し、花瓶の中に

文化十二年乙亥夏六月初二、当長行軒青々光琳居士一百週諱

因製此像以修其冥福 末弟抱一暉真薰沐謹写

と記されたこの観音図は、今も京都妙顕寺に納められている。

光琳顕彰運動として、次に抱一が計画したのは墓所の修復であ

る。妙顕寺塔頭興善院境内の尾形一族の墓地は、後に同寺塔頭本行院の管理下となったが、天明八年の大火後、衰退の極みにあった。6の請取に、「本行院江御寄附諱而頂戴之、右院跡者貪坊故住僧度々更代有之、行末鹿略相成」と書かれているのも興味深い。

文政二年秋、抱一は向島梅屋敷（百花園）の経営者で、俳諧の友でもある佐原菊塙を自分の名代として京に送った。『句藻』「鶯鶯」の巻には、

菊塙餞別のすりものに句望れて

垂懸の眠心や秋の雲

京都妙顕寺中本行院に光琳之碑を建るとて

我等迄流れをくむや苔清水

と記されている。

菊塙は、光琳の子孫・小西彦右衛門と対面し、適当な石材探しに京の川原を一緒に尋ね歩いている。この間の事情を伝えるのが、3・4・5の断簡で、菊塙の手紙の一部かと思われる。次に翻字を掲げる。

（破損）雅事多、漸く（破損）昨京着仕候。早束小川（破損）頭寺参上、墓所相（破損）別紙ニ申上候（破損）。光琳ハ京寺嶋丁銀座（破損）者にて銀座ヲ建（破損）、（以下不説）（3）

台石斗ニて候。本行院上人様の事ハ（破損）く存被出候事（破損）、別紙申上候通ニ候ヘハ我（破損）、持参ノ御下書如何可仕ヤ。（破損）（4）

光琳ノ墓斗、如此ニ半分相建候ヘハ、御下書モ（破損）ろしく候。先祖ノ碑銀座ヲ相立可申候ヤ。（以下不説）（5）

5の下部には、墓碑の略図が描かれている。7は、同年十二月七

日付、本行院からの礼状である。「御閑居様」は、抱一をさす。

此度菊鳥様御登京ニ付、長江軒様御石碑仰付被為下、難有仕合奉存候。彼是年内余日茂無御座候而、来陽早々出来仕候。

とあり、石碑完成は文政三年早春のころと推察される。「覚」と記された8の請取は、三月二日の日付で、この日に開眼供養が行なわれたらしい（光琳の命日は享保元年六月二日）。この時も抱一は、文化十二年と同額の金貳百疋を同寺に寄進している。

現在、京都市上京区の泉妙院（天保二年、興善院跡に再建）に残るこの碑は、抱一の字で正面に「長江軒青々光琳墓」、右側面に「享保元年六月二日」、左側面に「文政二年己卯十一月 雨華庵抱一建之」と刻まれている。

本行院より伝えられた光琳位牌、光琳筆草花図屏風、宗謙筆小倉百人一首帖などを所蔵する泉妙院の境内には、同碑の前に尾形一族の墓が並んでおり、毎年六月二日には光琳忌法要が営まれている。

9は、尾形家系図である。次に翻字を掲げる。

緒方 本国豊後

緒方三郎惟義之苗裔

字新三郎

伊春

奉土足利義昭公賜禄五千石

義昭公敗後洛ニ住

道柏

字新三郎

北野天神社傍有緒方社道柏  
以其後故事社歛其神銭後  
姓ヲ作尾片

宗柏

字新三郎

大御台様 御意を以  
東福門院様御呉服所被  
仰付

宗謙

初字主馬 名浩齋

東福門院様御呉服所相勸

光琳

初字市永名惟富後方祝

画を好家業トス法橋ニ成姓ヲ作小形

深省

初字権平名惟允

焼物細工を好家業トス号乾山

寿市郎

初字辰次郎 名方淑

京都銀座役人小西彦九郎養子ト成

後彦右衛門ト改

勝之丞

光琳名跡ニ可相立処早世

宗右衛門

初字才次郎

大坂町人石井吉右衛門養子ト成

右光琳<sup>後彦右衛門ト</sup>伴<sup>改</sup>市郎<sup>小西家養子ニ成、</sup>幸次郎<sup>後彦右衛門ト改</sup>  
 伴私と相続いたし、則私儀ハ光琳四代之孫ニ御座候。光琳死後  
 小形之名跡者不相立候得共、右初代伊春ハ私迄、血脈者続キ御  
 座候。右者御尋ニ付相認申候。以上。

卯十二月 小西彦右衛門

尾形家系図に続いて、「卯十二月 小西彦右衛門」とあるが、この  
 八卯Vについて少々考えてみたい。「年譜考」には、文化四年丁卯  
 の年に、彦右衛門が抱一からの尋問に対して尾形家系図を送った、  
 と記され、同氏の「小形光琳並に尾形家の事」(『書畫骨董雜誌』85  
 号 大正4)には、この系図が『尾形流略印譜』の巻末に付されて  
 いるとの報告もある。

しかし、『尾形流略印譜』には、明治二十五年、抱一門下の中野  
 其明が増補を付して印行した増補版(春陽堂)があり、この系図お  
 よび書状は、この増補版の巻末に初めて使われているのである。編  
 者其明の名で、「抱一上人小西氏へ光琳系図被尋し時、送りたる手  
 紙其儘、印譜追加ニ添」と記され、書状の結びを「文化四年卯十二  
 月 小西彦右衛門」としている。文面から見て、其明が9の資料を  
 使っていることに疑いの余地はない。八卯Vを文化四年と推定した  
 のは其明であり、年譜考および以後の諸論考も、これを踏襲してい  
 ると思われるのである。

抱一の命を受けた菊塙の京滞在は、文政二年の秋から三年春に  
 かけてであるが、この折小西彦右衛門と行動を共にし、光琳資料を  
 数多く譲られている(『年譜考』)。この系図も、その時に菊塙が持  
 ち帰ったと考えることは自然であらう。即ち「卯十二月」は文政二

年己卯十二月であり、9は、3・4・5の断簡と同時期のものとな  
 る『尾形流略印譜』については別稿の用意がある。

光琳の弟乾山の墓所を、抱一は上方と信じ探し求めていた。『乾  
 山遺墨』(文政六年刊)の自跋に次のように記している。

余緒方流の画を学ぶこと久しと雖、更其意を得ず、光琳乾山一  
 双の名家にして世に知る所なり。ある年、洛の妙顯寺中本行院  
 に光琳の墓あると聞、其跡を尋るに墓石倒伏。予いさゝか作を  
 して題字をなし其しるし迄に建。

と、文政二年のことを記し、続いて

其頃乾山の墓碑をも尋るに其処を知ものなし。年を重、京都の  
 人に問と雖さらにしらず。

と書いている。菊塙上京の折にも探索は行なわれたであらう。小西  
 彦右衛門書状中の語「御尋」には乾山墓所の所在も含まれていたか  
 もしれない。

『乾山遺墨』跋文は次のように続く。

此年十月、不計して古筆了伴が茶席に招れて其話を聞く。深省  
 が墳墓、予栖草庵のかたわら叡麓の善養寺に有とゆふ。日を待  
 ずして行見にそのことの如し。塵を払、水そゞき、香花をなし  
 札拝して草庵に帰。この遺墨を写し置るを文庫のうちより撰出  
 して一小冊となし、緒方流の余光をあらはし追福の心をなさん  
 とす。于時文政六年癸未十月、乾山歳八十一歿てより、此年又  
 八十有一年なるも又奇なり。

於叡麓雨華庵抱一採筆

長年尋ね求めていた乾山墓所を、根岸の雨華庵に程近い善養寺に

発見した抱一は、これを記念して、境内に石碑を建立した。10はその拓本である。乾山を好み、紫翠の号も持つ大沢永之もこの企てに協力したことが、碑文によって知られる。永之は、武州行田の呉服商で、光琳兄弟への関心も深く、抱一の芸術活動の後援者として、忘れてはならない人物であるが、このような、抱一の詞を借りるならば「同好」（断簡1）の人々も江戸琳派成立の陰の功労者といえよう。なお、善養寺は現在豊島区西巢鴨に移転したが、乾山墓とこの碑は同寺に残っている。

以上、十点の文書を通して酒井抱一による尾形光琳乾山兄弟顯彰活動の一端を垣間見てきたが、この書類には次のような添書一紙（多少事実の誤認あり）がある。

この古文書は、酒井抱一上人、青々光琳居士の墓を京都本行院ニ建立す。其時の万事使者を、向じま百花園梅屋菊塙ニたのむ。落成の後、東都根ぎしにて百年の催しとし、光琳百幅をあつめ百周年の会をなす。其後、光琳百図を出し候。其後根岸雨花庵に火災あり、其火中よりこの古文書を出候。幸なる内にも又あわれなり（中略）。池田孤村より其子江村に伝へ、また其子池田慶二郎伝ふ。同氏より（後略）。

と、現所蔵者の先代筆で記され、昭和十年の日付が付されている。文中に名に見える池田孤村は、抱一没後根岸雨華庵を守り、『新撰光琳百図』『抱一上人真蹟鏡』などを編んだ抱一の高弟である。この十点は、「年譜考」執筆時には他の抱一資料と一所に所蔵されていたと見られるが、同書は所蔵者を明らかにしていない。何時（昭和二年から十年の間ではあるが）、どのような理由でこの

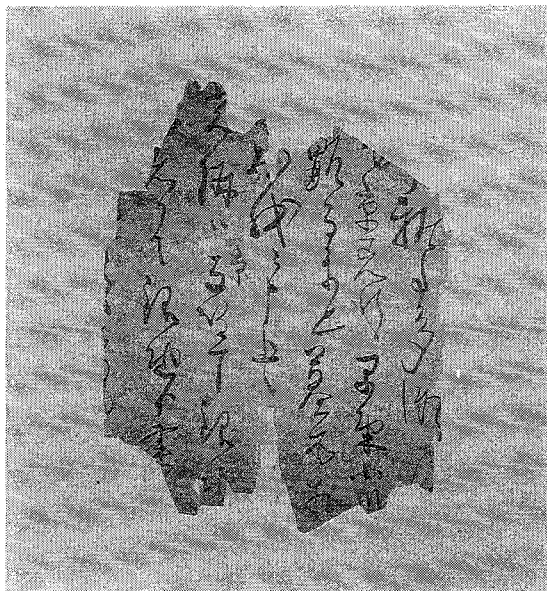
十点のみが離れたのかは不明である。

正徳のころ江戸に下った尾形光琳が、津軽家、姫路酒井家の江戸屋敷に滞在していたことは夙に知られている。その折、京の上島源承にあてて認められた書状に、「御大名ノ御身ノ上見申候ても少も不浦山候。貧ニ候共、心楽ニいたし度候」の一節があることも有名である。

百年の後、その大名家を出家という形で離れた酒井抱一は、自らを光琳芸術を継ぐ者と認じ、光琳乾山兄弟顯彰に私財を投じ、作品研究に心血を注いで惜しむ所がなかった。その精進の中から編まれた『光琳百図』『乾山遺墨』を始めとした数々の書は、今日でも琳派研究に欠かせぬ重要資料である。また、尾形光琳・乾山兄弟との出会いが、抱一自身の絵画作品、俳諧作品に与えた有形無形の影響は、計り知れないものがあつた。抱一を祖とする江戸琳派は、その後、鈴木其一・池田孤村・中野其明らに受け継がれて、日本絵画史の中に揺ぎない位置を占めるに到っているのである。

この、ささやかな報告をまとめるにあたり、閲覧・紹介をご快諾下さったご所蔵者には、ご迷惑がからないようお願いのみである。また、尾形仙先生には、成城大学大学院入学以来数々のご指導を賜わった。この春ご退官の先生に、心からお礼を申し上げます。





3



4

5



6

御諸

今般為光琳呈第百遠諸追善  
 既抱一様御直画之觀音產壇  
 尊像軸相相入外緒者流畧印諸  
 并古金藏百足來行院七御寄所  
 謹而頂戴之古院撫者貪坊故怪  
 僧產王更代有之行來兼照相成期  
 然入右尊像與印諸者古史館置  
 金藏百足來行院相渡後用古縣宜被  
 者遂可（？）張以上法泉院  
 天化中乙丑年  
 七月十八日  
 希聚 豐田餘齋前校  
 永行院



一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

卷之二

一  
金華先生  
在子令經世輯一  
洪國脈又事七月  
陳孝師不學家範  
王東平經世集卷二  
卷之二

七  
前日

古詩一首

梅道人題款

餘方 戶國畫後

餘方之庫 惟義之苗裔

任春

字對春

奉性足利義隆為跡立子名  
義隆公歟後派

道柏

字對市

北野天守江傳有精方近建指  
以其後故亭早社歟其非誤後  
姓作危行

宗柏

字對市

八御臺後 冲意之

東福門院後中景張所止

作分

宗禎

和生三男 名治平

東福門院後中景張所止

光琳

字平忠 名惟國 尊良

血之好義者 名惟國 尊良

深有

和生三男 名治平

鹽田田之好義者 名治平

畫田市

和生三男 名治平

系以眼在江之西表有在十取  
後是也

椿之忠

光祿在平中亂事也

宗庵

和生三男

大坂町人 名井忠庵 在子也

和生三男 名治平

西成在子 殿將至 治平

將和之花後 分枝三枝

臣代 和生三男 名治平

和生三男 名治平

和生三男 名治平

卯二月

小西家

